

全体講評

本年度の辰野千壽教育賞は、応募者が9人と少々寂しい結果となりましたが、比率で見れば昨年度以上に若手の先生方からの応募が多く、「独創性があり将来の発展・応用が期待される教育実践を積極的に支援し、継続的な取り組みを促す」という本賞の目的に照らせば、望ましい傾向が続いていると喜んでいるところです。今後とも、ベテランの先生方の年月を積み重ねた実践研究はもちろんのこと、若手の先生方の、将来の発展が大いに見込まれる実践研究も、積極的に選考していきたいと思えます。

さて、本年度の応募作ですが、若手の先生方からの応募が多かったということもあり、「おもしろいけれども少々物足りない」という評が多く寄せられました。このことについて、詳しく書いてみます。

■独創性について、ふたたび

今回に限らず、選考過程でよく議論になるケースの一つを紹介しましょう。ある委員が、「この実践はなかなか興味深い」と高く評価する意見を述べたとします。すると、その専門分野に詳しい委員から、「この程度の実践なら、すでに数多くやられていますよ」と反論が返ってきて、そこから応募作の実践の先進性・独創性について議論が始まる、という流れです。一部の委員から支持されているわけですから、特色ある実践であることは間違いないのですが、専門的に見ると先行実践の中に埋もれてしまい、その独創性が際だって見えないという、そんな状況です。

昨年も書きましたが、学術研究論文とちがって実践研究では、指導法を一から自分で独自に開発した、100%独創的な研究というのはそうそうあるものではありませんし、そこまでのレベルを求めているわけでもありません。現実的には、最近提案・開発された新しい指導法を自分でも取り入れ、自分なりに、あるいは自校の状況に合わせて工夫を凝らしたうえで実践し、成果を得たという場合が多いと思えます。

そのときに、もう一步踏み込んで記述してほしいのは、先行研究や先行実践に対して、あなた自身がどのような工夫・改善を施したか、あるいはどのような新たな発見があったか（改善点が見つかったか）、という点です。そのあたりの記述が弱いと、どうしてもどこか既視感のある実践、新しい指導法を「自分も実践してみました」、その結果「言われている通りの効果が得られました」に終始する実践報告に見えてしまいます。昨年度からの繰り返しになりますが、ぜひこのことを意識して、自分なりに工夫した点、発展させた点等につい

てしっかりアピールするようにしてください。

■継続と広がり

「おもしろいけれど少々物足りない」と評価される実践、もうひとつのケースは、「もう少し研究の展開を待ちたい」という場合です。これは、若手の先生方からの応募が多かったことと関連しています。意欲的な実践と見受けられるのですが、1回限りの実践の報告であるため、その効果がどの程度安定的に見込まれるのか、また他の単元や教科にどの程度広がりが期待できるのかという点で、研究の意義が今ひとつ判断しかねるケースです。

内容的にはけっして低い評価ではないので、もう少し様子を見てみたい、というのが正直なところですよ。ですので、ぜひ研究を継続してください。そしてできれば、少し毛色の違った領域にも展開してみてください。それにより、格段に説得力が増すことと思います。再応募をお待ちしています。

■効果の検証について

今年の応募作の大きな特徴として、授業実践の効果を、子どもたちへのアンケートや成果物の出来映えから、数量的に証拠づけているものが多かったことがあげられます。単に教師の印象やたまたま見かけたエピソードに依拠するのではなく、こうした客観的な証拠をしっかりと取って検証しようとする「研究的」な姿勢は、たいへん好感が持てます。これについては、今回限りの傾向ではなく、今後も続いていくことを願っています。

そうした望ましい状況にあることを踏まえたうえで、少し欲ばった要望を述べさせてもらえば、実践の成果だけでなく、授業の最中の子どもたちの様子、つまり意欲的に参加していたか、楽しんでいたか等がわかるとさらによいと思います。こちらは補足的なものですので、エピソードデータ程度でもいいのですが、成果だけでなく子どもたちが好意的に受けとめていることがわかれば、さらに実践の意義に厚みが増すのではないかと思います。

■最後に

データの統計分析をはじめ、しっかりとした研究ベースで行われた実践報告が増えていることは、喜ばしい限りなのですが、その反面、応募書の記述の中に専門用語が氾濫し、専門以外の委員にとってはきわめて難解になりがちという現実もあります。選考委員は様々な専門の人たちで構成されていますので、できるだけ平易な言葉で記述するよう心がけていただけると、たいへん助かります。

以上，本年度の審査を終えての感想でした。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

辰野千壽教育賞実行委員長